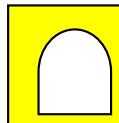


日吉台地下壕保存の会会報



第125号
日吉台地下壕保存の会

2016年度総会のお知らせ

1989年4月、日吉台地下壕保存の会の第1回総会が開かれました。会員数約100名の中心となつたのは、慶應義塾の教職員と地域住民の有志でした。当時は戦後40年を経たバブルの時代で、戦争体験者の多くは沈黙し、無数の貴重な戦争遺跡がいとも簡単に破壊されました。愚かなことに、私たち日本人はそれが進歩であり、繁栄であると錯覚していたのです。

その一方で、戦争研究と戦争遺跡に対する研究が活発になり、各地でその地域に残る戦争遺跡保存活動がおこりました。日吉台地下壕保存の会の発足も、全国的な動きと呼応していたといえるでしょう。

27年前の発足から毎年総会を開き、会の基本理念を確かめながら、運営委員を中心に、休むことなく地道な活動を続けてきました。会報は年4、5回発行し、活動を支える会員は4倍近くに増えました。それは学徒出陣世代である故永戸多喜男初代会長の、平和への強い願いと、寺田貞治初代事務局長の行動力のおかげです。

当会の総会では、毎年様々な分野の専門家を招いて、共に学ぶ場としての講演会を開催しています。今年の総会記念講演は、日本近現代史の新井勝紘専修大学元教授が引き受けくださいました。テーマは、「軍事郵便」についてで、戦地から家族にあてた私信ですら必ず検閲されるという制度です。会では初めて取り上げるテーマですし、氏はその研究の第一人者です。6月4日には、お誘いあわせの上、慶應義塾日吉までお運びくださいますよう、お願ひいたします。

日時 2016年6月4日(土) 13:00~16:00

場所 慶應義塾大学日吉キャンパス
来往舎シンポジウムスペース

記念講演 13:00~14:45

演題「兵士の手紙を見る・読む・考える
“命の便り” 軍事郵便からみえるもの」
講師 新井勝紘さん(専修大学元教授)

総会 15:00~16:00

- ・2015年度活動報告
- ・2015年度会計報告
- ・2015年度会計監査報告
- ・2015年度役員選出と承認
- ・2015年度活動方針の提案と承認
- ・2016年度予算の提案と承認
- ・日吉台地下壕保存の会会則全部改正

目 次	
<u>2016年度総会のお知らせ</u>	1p
<u>お知らせ</u> “命の便り”、平和のための戦争展inよこはま、	
第20回戦争遺跡全国シンポジウム(松代大会)	2p
<u>お知らせ</u> 渡辺賢二さんが2015年度川崎市文化賞を受賞	
亀岡敦子 3p	
<u>報告</u> 海軍通信兵 近藤恭造さんの体験談 遠藤美幸 4-5p	
<u>報告</u> 2015年度地域のチカラ最終報告 小山信雄 6p	
<u>公開講座</u> 「アジア・太平洋戦争末期の日本海軍」 7-8p	
◆戦後70年度末に日本海軍の戦略の欠陥と問題を学ぶ	
石橋星志	
◆「アジア・太平洋戦争末期の日本海軍」を聞いて 佐藤宗達	
<u>連載</u> 海外の戦跡めぐり2「戦場にかける橋」 佐藤宗達 8-9p	
<u>空襲体験</u> 元理事生福井寿美子さんからのお手紙 9p	
<u>連載</u> 日吉第一校舎ノート(9) 阿久沢武史 10-12p	
<u>連載</u> 地下壕設備アレコレ(16) 山田譲 12-13p	
<u>資料紹介</u> 第3010設営隊行動記録 山田譲 13p	
<u>活動の記録など</u> 喜田美登里 15-16p	

お知らせ

総会記念講演会（日時等は1面参照）

「兵士の手紙を見る・読む・考える“命の便り” 軍事郵便からみえるもの」
新井 勝紘さん（専修大学元教授）

戦場の最前線にいる兵士と銃後を結ぶ唯一のコミュニケーションが、軍事郵便でした。検閲という関門がありましたが、私たちは軍事郵便に込められた兵士の心情を、深読みしてみる必要があります。戦争体験者がいなくなる時代を迎え、これまであまり光があたらなかった軍事郵便に注目し、その歴史的意味を、一緒に改めて考えてみたいと思います。

平和のための戦争展 in よこはま

5月28日(土)～6月1日(水) 横浜駅西口かながわ県民センター

特別企画（2階ホール）13時～16時

5月28日(土) 講演：「戦争のない世界を」小山内美江子さん（実行委員長・脚本家）

「奇跡の船・氷川丸からのメッセージ」伊藤玄二郎さん（「氷川丸ものがたり」著者）

報告：「高校生が歩いて考えた横浜の空襲」横浜商業高校グローカリー

「戦争捕虜へのメッセージ」桐蔭学園高校女子部（TEAM P. O. W）

5月29日(日) 朗読劇：「証言3・横浜大空襲」日吉台中学校演劇部

講演：「人はみな歴史の中継ランナー」ジェームス三木さん（脚本家）

展示（1階 展示場）

横浜大空襲他 約500点（地下壕保存の会も展示参加）

5月30日(月) 13時～19時

5月31日(火) 10時～19時

6月1日(水) 10時～18時

第20回戦争遺跡全国シンポジウム長野県松代大会のお知らせ

日 程 2016年8月20日（土）～22日（月）

会 場 長野市松代町（松代文化ホール・松代公民館・松代ロイヤルホテル）

内 容 20日 全体会・地下壕見学・映画会

21日 分科会・全国交流会

22日 地下壕見学

会期中 戦跡パネル展示・書籍販売

主 催 戦争遺跡保存全国ネットワーク

第20回戦争遺跡保存全国シンポジウム長野県松代大会実行委員会

☆ 今年の大会は、松代大本営地下壕のある松代町で開かれます。大会開催要項と申し込みについては次号に掲載します。

お知らせ

渡辺賢二さんが2015年度「川崎市文化賞」を受賞

副会長 亀岡 敦子

渡辺賢二登戸研究所保存の会共同代表が、2015年度「川崎市文化賞」を受賞されました。

43回目となるこの賞は、文化・芸術・教育において優れた功績をあげた川崎市に縁の個人や団体に授与されるものです。渡辺さんの受賞理由としては、法政大学第二高等学校教員時代に、高校生らとともに、ベールに包まれていた陸軍登戸研究所の実体を解明し、明治大学平和教育登戸研究所資料館の設立に貢献した点と、また長年にわたる平和教育があげられています。渡辺さんは、私たち日吉台地下壕保存の会とは20年以上、横浜・川崎平和のための戦争展を協力して開催し、神奈川の戦跡保存活動を牽引してきた一人です。

2月20日、冬には珍しい激しい風雨にもかかわらず、100人近いゆかりの人々が明治大学生田の丘に集まり祝賀会を開きました。



2015年度「川崎市文化賞受賞を祝う会」
で挨拶される渡辺賢二さん



当会の長谷川副会長による三本締めの呼びかけ

山田朗明治大学教授の開会のことばに始まり、川崎市職員、市民の学習会、市民合唱団等々、お祝いのスピーチはひきも切らず、渡辺さんの豊かな学識と暖かな人間性を語るものばかりでした。

当会の阿久沢会長の閉会の言葉と、長谷川副会長の三本締めで、笑顔に満ちた祝賀会は終わりました。

報告

海軍通信兵・近藤恭造さんの体験談

運営委員 遠藤 美幸

2016年3月12日(土)、慶應義塾大学日吉キャンパスにて第10期ガイド養成講座の第3回目が行われました。今回は、日吉台地下壕と縁の深い最後の連合艦隊司令長官・小沢治三郎中将指揮下の第1機動艦隊(空母4隻、戦艦2隻、巡洋艦3隻、駆逐艦8隻の計17隻)、いわゆる小沢艦隊の航空母艦 瑞鶴(すいからく)の通信兵であった近藤恭造さん(87歳)をお招きして、海軍生活の思い出から空母瑞鶴の撃沈の様子などめったに聞けない戦場体験についてお話し頂きました。

1943(昭和18)年、近藤さんは海軍特年兵に満14歳で志願し、1944(昭和19)年1月10日、奇しくも15歳の誕生日に山口県の防府海軍通信学校に入校しました。海軍特年兵とは海軍が満14歳で募集した史上最年少の志願兵です。少年兵よりもさらに若い特例に基づいたものであったため、特別年少兵、特例年齢兵とも称され、略して特年兵といいます。海軍特年兵は、1942(昭和17)年の1期から4期まで総じて17,200名に及び、そのうち5,000名が戦死したといわれています。

近藤さんはこの防府通信学校で、三田尻湾でのカッター訓練、手旗訓練などの新兵教育を受けた後、横須賀海軍通信学校へ転属することになります。そこから近藤さんを含め50名が「特信班要員」に選抜されました。特信班とは海軍の特務機関(海軍軍令部特務班)の通信諜報を担当する組織です。その後、特信班教育のために静岡県の鈴川海軍通信学校に入校します。



近藤恭造さんによる講演の様子
(第10期ガイド養成講座 3回目 来往舎中会議室にて)



「戦死者の供養のために伝えたい」
と語る近藤恭造さん

近藤さんは米国の短波放送の傍受のため、アルファベットを用いた受信教育を受けます。鈴川通信学校は2階建ての建物を使用し、2階に受信機60台、1階は食堂や寝室で一般家庭のような和やかな雰囲気で教育が行われました。気合を入れるバッター(精神棒で尻を叩く)や説教もなく、毎日白米を食べ、食後に甘味も出ました。戦時の大半の兵士の食糧事情とは雲泥の差です。その代わり、特信班教育は秘密裏にみっちりと行われました。近藤さんはアルファベットを1分間に120字聞き取る訓練や電

鍵で1分間に120字を打つ手指の訓練もしました。当時鉛筆が10~20本くらい支給され、毎日小刀で全部削るので手指にタコができたそうです。

1944(昭和19)年2月から9月までの7ヶ月の特信班教育が修了し、近藤さんを含む10名は第1機動艦隊司令部に配属が決まりました。1944(昭和19)年10月19日、近藤さんは第1機動艦隊の旗艦の空母瑞鶴に乗艦し、艦船下部電信室で敵情傍受の任に当たります。10月20日夕方、第1機動艦隊は大分湾を出て、豊後水道を一路南下しフィリピンを目指します。10月25日、瑞鶴の運命の日がやってきました。早朝から米軍機F6Fグラマン機の攻撃を受けます。その後も米軍機の間断ない攻撃を受けた瑞鶴は、午後2時14分に撃沈。近藤さんは船底の通信室から避難するのが非常に困難な中、隣にいた上官の兵曹の「俺についてこい」との声を頼りに、兵曹のあとを必死に着いていき甲板に辿り着くことができました。しばらくしたら「全員飛び込め!」との命令があり、すべり台からすべり降りるように飛び込み、沈没時の渦に巻き込まれないように200メートルくらい死に物狂いで泳ぎました。近藤さんは瑞鶴が垂直に立って爆音を発して沈んでいく姿を漂流物の材木につかまりながら見ていました。凄い振動で心臓が爆発するかと思ったそうです。漂流時も上空からグラマンの空襲を受けていたので生きた心地がしません。皆で固まっているとグラマンの攻撃目標になるし、ある程度固まっていると救助されないというジレンマのなか、運良く駆逐艦に救助されました。瑞鶴には1,200名が乗船し、3分の2が戦死しました。特信班の特年兵10名のうち生き残ったのは2名で、その一人が近藤さんでした。



当時の海軍が使っていたモールス信号用電鍵と
レシーバー (久里浜通信学校歴史館所蔵)



近藤さんが使っていた92式特受信機改4
(久里浜通信学校歴史館所蔵)

最後に、近藤さんは「戦争体験者が後世に戦争の残酷さや非道な行為を伝えることが生き残った者の責務であり、戦争防止と恒久平和のためであり、亡くなった戦友への供養にもなります」と述べられました。私は近藤さんのお話を聞きながら、戦場の最前線に14、5歳の少年をも兵士として送らざるをえなかった作戦に大きな疑問を感じるとともに、少年の前途ある未来を奪った悲惨な戦場の実像を決して忘れてはならないと心に刻みました。

報告

2015年度地域のチカラ応援事業「平成27年度最終報告会」

運営委員 小山 信雄

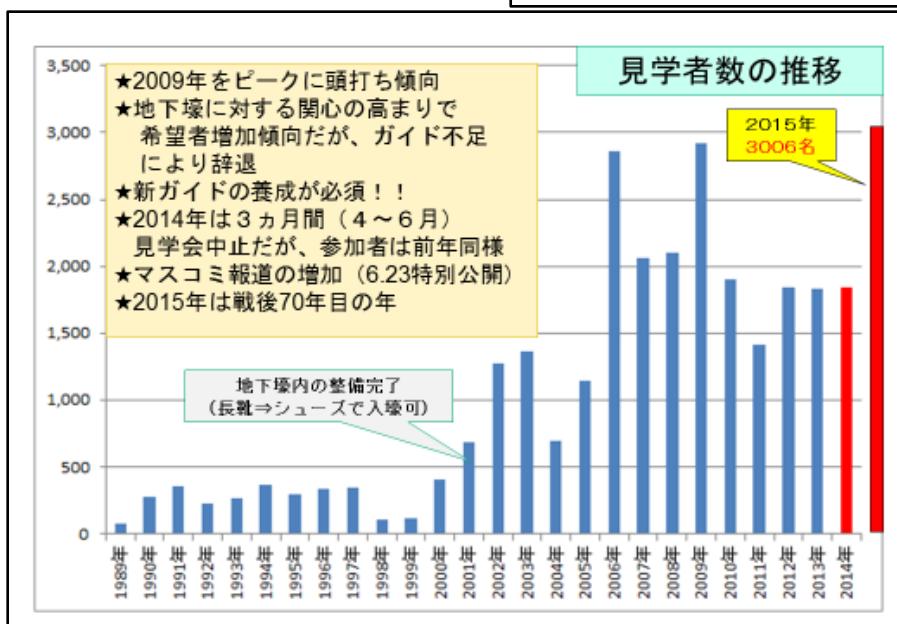
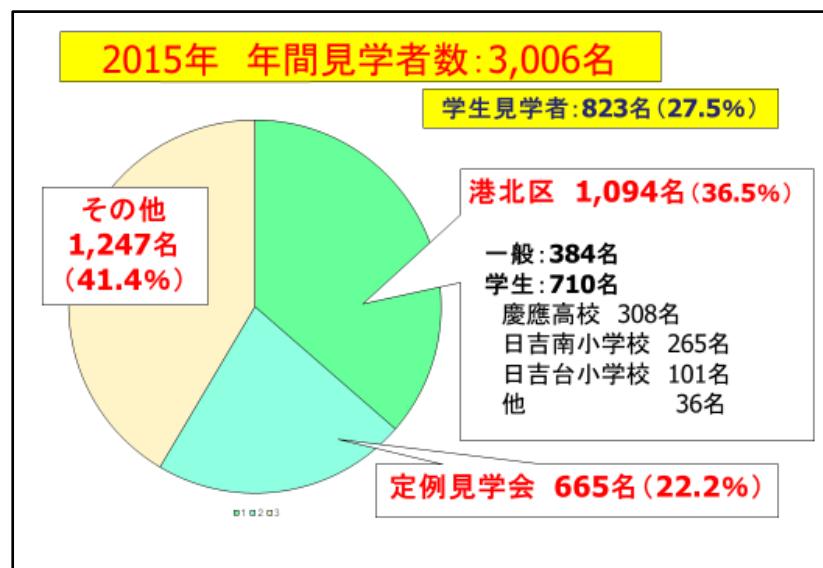
3月12日(土)、港北区役所4階会議室にて、“地域のチカラ応援事業最終報告会”が開催されました。チャレンジコース23団体の内、8団体が発表を行うことになり、日吉台地下壕保存の会は前年度に引き続き発表を行いました。7名の事業推進懇話会委員と約50名の参加者・観客の皆様に向かって、持ち時間8分間(厳しく時間厳守)の最終報告を行い、質疑応答となりました。

昨年は、戦後70年の節目に当たる年でもあり、また、昨年1/31-3/22に神奈川県立歴史博物館で開催された特別展「陸にあがった海軍」が大盛況であった影響も受け、過去最高の3,000人を超える見学者となった事、及びガイド養成講座受講生も、12名と増加している現状を報告しました。

特記事項として、昨年6月にTV、通信社、新聞社等マスコミ各社(計17社)に対する特別公開を行い、当日夕方のニュースで大きく取り上げられ、翌朝の新聞にも広く掲載され、AP通信社経由で世界500以上の通信社に配信された事や、8月に行った港北図書館でのパネル展示会には多くの



港北区役所4階会議室での発表風景



人の関心を集め、講演会では会場の会議室が満席(約80名)になるほど盛況であった事などを報告。

引き続き、ガイドの人員確保と質の向上の重要さを訴えるとともに、昨年末に資料集(日吉は戦場だった)を取り纏めたことや、今後体験者達からの聞き取り、文字起こしなど資料としての保存に注力することも報告しました。

公開講座

アジア・太平洋戦争末期の日本海軍

一橋大学教授 吉田 裕

◇戦後70年の年度末に日本海軍の戦略の欠陥と問題を学ぶ

運営委員 石橋 星志

今年度の公開講座は、3月19日に来往舎のシンポジウムスペースで、一橋大学教授の吉田裕さんに「アジア・太平洋戦争末期の日本海軍」と題して講演をしていただきました。戦後70年の年度中に吉田先生のお話を日吉との願いを快諾いただき、当日も80名近くの来場者で盛況でした。

海軍の決戦思想が日露戦争の日本海海戦を理想とし、誤った目標のための合理化の果てに、零戦などのパイロットの命を軽視し、引き替えに能力を持つような兵器を生んだこと。また、特攻作戦を見ても、海軍兵学校出の軍人を温存し、飛行訓練を十分終えていない、予科練（少年兵）や予備士官（学徒出陣した大学生）などを多く出撃させていることなど、巷に流布する海軍はスマートで合理的とする海軍神話をデータや事実から覆すお話をでした。

著書の販売も先生が1冊ずつサインされたこともあって好評でした。会のメンバーからも、著書も読み、認識を新たにしたとの声が聞かれました。



講演される吉田裕さん
(来往舎シンポジウムスペース)

◇公開講座「アジア・太平洋戦争末期の日本海軍」を聞いて

運営委員 佐藤 宗達

講師の吉田裕氏の著書は解り易く書かれておりましたが、今回の講演もお聞きして解り易くて全部頭に入りました。日頃は地下壕、連合艦隊に眼が向いており、今回の海軍についてのお話は今までの断片的な知識を纏めてくれました。

「大山大尉事件」で臨時軍事費を獲得し、対米軍事訓練にあてた。「人造石油計画」は知つてましたが現実的選択肢はシェールオイル方式で満州にはあった。「珊瑚海海戦の教訓」で空母は離して展開が生かされず、ミッドウェー海戦の敗北。「海上交通路の攻撃を軽視」日本の場合潜水艦を米主力艦の攻撃にあてるが大型化しエンジン音が大きく敵に察知されてしまう。また「特攻作戦」では体当たり攻撃の破壊力は小さい、当初の目的は敵空母の甲板を攻撃、敵機が飛べないようする、など90分で本1冊内容の濃いお話をしました。また質疑応答でも戦後も掃海艇が働き、朝鮮戦争にも参加したなど興味深い講演でした。

**連載****海外の戦跡めぐり（2） 戦場にかける橋・泰緬鉄道**

運営委員 佐藤 宗達

映画「戦場にかける橋」の題材となった泰緬鉄道は難工事でした。1942年日本軍がビルマ（現ミャンマー）に侵攻、ビルマ戦線への兵士・物資輸送のためのルートを確保するためにタイと結ぶ鉄道建設を計画、建設は迅速さを要求されたためビルマ側・タイ側両方から開始した。作業には日本軍だけでは到底足りなく、連合国軍の捕虜約6万人の他、数十万人のタイ・ビルマ・マレーシア・インドネシアの労働者が使役された。熱帯での重労働、コレラ・マラリアの蔓延、岩場の開削、断崖絶壁に沿わせるように木の桟道橋の建設、5年はかかるといわれた難工事は数万人の死者をだしてわずか1年で完成させた。大量の死者を出した過酷な建設労働から英語圏ではDeath Railwayとも言われてる。完成後は連合軍による空爆を受け、破壊されても復旧工事をして終戦近くまで運行を続けた。戦後は必要性の低さと維持費の高さなどから大部分が廃止されたが、タイ側で一部カンチャナブリーとナムトック間で運行されている。タイのバンコクから西へ約110kmに位置するカンチャナブリーへはバスツアーガーディングであります。まずクウェー川鉄橋駅へ。クウェー・ヤイ川（クワイ川）にかかる橋が「戦場にかける橋」で歩いて渡ることもできます。但し映画のロケで使われた橋とは構造が違うのでご注意ください。駅前には当時使われた蒸気機関車が展示されています。隣駅：カンチャナブリー駅の近くには連合軍共同墓地がありますが墓の多さには胸をうたれます。列車に乗りますと約50km先のタム・クラセー（アルヒル）桟道橋では岩壁にへばりつくように300mの桟道橋を徐行します。かなりの高さの橋ですし身を乗り出すと岩壁にあたりそうでヒヤヒヤする場所でした。観光面で宣伝されていますが数万人と云われている犠牲者を忘れることがないよう伝えていきたい。一方ミャンマーでも泰緬鉄道を見直し観光振興に役立てようと2016年1月にミャンマー側起点のタンビュザヤ駅の跡地に泰緬鉄道博物館を開館しております。



アルヒル桟道橋で徐行運転する列車



クワイ川にかかる「戦場にかける橋」

空襲体験

海軍航空本部地下壕勤務・元理事生福井寿美子さん
からのお手紙

(前回、体験聞き取りと短歌掲載の福井さんから、その後、お手紙をいただきましたのでご紹
介いたします。)

春もそこ迄来ている様な頃となりました。御丁寧に沢山の地図をお送り下され有難うござ
いました。特に旧深川区の地図を見て一言余計な事かとも思いましたが参考までにペンをと
りました。

戦き火に逝きしうからら野に焼けり み骨のあるを幸と思えど

「うからら」とは母の兄、伯父一家の事です。長男の従兄は三度目の出征で陸軍の東部六
部隊(?)で赤坂に配属されておりましたので数日後、焼跡を探しに来た時、近所の人が「小
林さんは靈岸寺で死んでいるよ。重要書類の入った鞄は平野警察(現深川警察)へ届けてあるよ」と教えて呉れました。

このお寺は白河藩にゆかりあるお寺で親鸞上人の銅像があり、その下で十六人が焦げあと
もなく煙にまかれていた様でかたまっていたそうです。この十六人をこのお寺でまとめて野
に焼いて十六人分の四(人分)を小林家の菩提寺(巣鴨)へ納めました。あと二、三百米で
清澄庭園へ逃げるつもりだったのかも知れません。従兄と連絡がとれたのは戦後でその時知
りました。

(中略)

皆々様の御活躍に深く感謝しております。有難うございました。

二月十九日

福井寿美子 拝

連載

日吉第一校舎ノート (9) 列柱のクラシシズム (その2)

会長 阿久沢 武史

キャンパス中央の広場(ロータリー)に面した校舎北側の側面には8本のオーダーが並び、校舎西側の正面玄関には4本のオーダーが並ぶ。高さは約8メートル、直径約1メートル、それぞれが床面から直接立ち上がり、基盤もエンタブラチュアもない。あえて言えばドリス式であるが、ドリス式に特有の装飾がいっさいない。一般にこの時代の銀行建築の円柱には、ドリス式にせよイオニア式にせよ、ギリシアのそれに倣って何本もの浅い溝彫りが施されるのが普通である。しかし第一校舎の列柱には何もない。ただ白くて太い柱が直立するだけである。日吉キャンパスの当初の全体計画によれば、直線の銀杏並木をのぼったその先にロータリーの一画が開け、左右対称に第一校舎と第二校舎を配し、正面には大講堂を建設する予定であった。銀杏並木の直線に対して直角に交差する樺並木、キャンパス中央には左右にそれぞれ8本の列柱を持つ白亜の校舎がシンメトリックに建ち、正面にはやはり4本の列柱を持つ大講堂が構える。このような計20本の列柱に囲まれた空間を中心軸にして、キャンパスが四方にその世界を広げていく。第一校舎もまた正面玄関の4本の列柱を中心にして、まるで翼を広げたような左右対称のシンメトリックな構造となっている。一方、銀杏並木の始点には日吉駅があり、駅舎を中心点にして放射状に日吉の街が広がる。それは田園都市構想に基づいて計画的に設計された街でもあった。放射直線状に広がる街路網は、ヨーロッパの近代的な都市計画の考えによれば「直線によってどこまでも見通せる」という近代の合理的な『まなざし』を実現するもの」(石田潤一郎・中川理編『近代建築史』昭和堂)であった。

このように「日吉」という空間全体が、論理的な(数学的な)比例関係(プロポーション)によって成立しており、その空間全体を象徴する建築物の造形として、古代ギリシア建築に源流を持つ古典主義は、やはり最もふさわしいものと言えるだろう。藤森照信によれば、規則正しい配列と構造によって作られる古典主義の建築は、一般に「〈威風〉〈秩序〉〈永遠〉〈知性〉の演出に向く」という(『日本の近代建築(上) 岩波書店』)。ヨーロッパで、アメリカで、そして日本で、古典主義の建築が、国家的なモニュメントや公共の建築物、大学・図書館・博物館・銀行等で採用された理由は、そうした「ギリシア」的なイメージに求められよう。



日吉台慶應義塾全配置計画図、福澤研究センター所蔵

古代ギリシア風の列柱を配する第一校舎は、「自由」や「民主主義」、「哲学」「数学」「論理」といった豊かな人間性と知性、そして精神の解放を表象するモニュメントであり、コンクリート打放しと白色スプレーの吹付けにこだわった網戸の理想はそこにあったと思われる。銀杏の並木をのぼったその先に現れる巨大な列柱が立ち並ぶ穢れなき純白の「学」の神殿が、彼の中でイメージされていたとしても言い過ぎではあるまい。

この点について、『情念の幾何学』において、網戸は次のように回想している。長くなるが引用する。ここには、師に対する敬愛の念があり、モダニズムとのせめぎ合いの中に立つ古典主義者としての矜持があり、自らが生み出した作品に対する建築家としての愛着がある。

しかし強く構想の中に秘められたものは、時代の動向に没入せず、鉄筋コンクリート構造による表現の可能性を追及することであった。コンクリート施工の上で外壁を打放し仕上げにしたこれほど大規模な建築がなかった当時、これを敢て適用したのも、素材への強い愛着と執念がさせたものであった。唯物主義的合理に組みすることをこばむ中村の鞭撻が、どれほどに励ましとなったか、大役に取り組む弟子への慈愛を身に滲みて味わう私達であった。

丘に向かって緩やかな勾配の学園通りは、現在ではその両側に亭々として銀杏の大樹が続き、やがて五十年の歳月が過ぎようとしている。しかし昔の静かだった丘の上には、現在谷口吉郎設計による校舎が立ち並ぶ。甚だ生産的な風貌を持ったその違和感は、曾禰・中條事務所が構想した理念に対して決定的である。正面に大講堂を構えて左右両翼と列柱でつなぎ、学びの空間のロマンをと希った原案の夢は、夢くも消えて影すらもない。当然ながら教育とは、現在、生産なのであり、建物はよくそれに応え、時代の要を果していると言えよう。

ともあれ、中條がこの丘に残した昭和の中世主義は、第二次大戦末期、日本海軍壊滅の直前、日本海軍連合艦隊総司令部に占拠され、墨一色に迷彩塗装を施されて、「ペンは剣よりも強し」と願った福沢の精神は踏みにじられたのであった。しかし創建から数えて半世紀、銀杏並木はいま、中條の親和の精神の証言者として、天空高く聳え立っている。(『情念の幾何学』建築知識)

第一校舎にはこのような作り手の思いが込められている。それは、すでに見たように28歳の若き建築家網戸武夫が、「処女のような清浄無垢の永い助走の果てに激しく燃えた」「汗と野心にたぎった、どろまみれの作品」であり、生涯に400を超える作品を世に出した彼の記念すべき出発点である。

第一校舎で初めて授業が行われたのは、昭和9年(1934)5月1日のことであった。この「はじまりの日」を祝して、同年5月の『三田評論』「日吉台第一期工事竣工す」には、次のように記されている。

待望久しうりし日吉台第一期校舎も此程いよいよ竣工し、五月一日より新入学の文、経、法、予科第一学年約一千名を収容して授業を開始することになった。昨年三月二十八日地鎮祭を挙行してより既に四ヶ月、其間何等の支障もなく工事はすらすらと進行し、曾ては先住民族の遺蹟として貝殻や石礫などを掘出したあたりに、今は雪白厳然たる近世アメリカンスタイルの鉄筋コンクリート三階建、延坪三千余坪の大校舎がそそり立ち、その前面には隋円形擦鉢形のトラック・フィールド、後方低地には本試合用及び練習用



1934(西暦)と2594(皇紀)が併記されている
レリーフ(校舎左端の二階部分の壁面)

のテニスコート九箇が完成し、其他の運動設備も著々工事が進められている。

ここで言う「近世アメリカンスタイル」とは、いわゆるアメリカンボザール、その建国の理念である民主主義の精神を表象した古代ギリシアを範とする古典主義に他ならない。正面玄関から見て校舎左端の二階部分の壁面には、竣工年が記されたレリーフが飾られ、そこには「1934」の西暦とともに「2594」の皇紀が刻まれている。

このようにして、日吉に新キャンパスが開校した。その後、時代は戦争に向かって進み始め、第一校舎も、そこに学ぶ塾生も、その大きな波にのみ込まれていくことになる。

連載

地下壕設備アレコレ【16】日吉の海軍省第十一分室と第七分室

運営委員 山田 譲

日吉の海軍地下壕群を築造した第3010設営隊伊東三郎元隊長の手記の題は「地下海軍省分室と施設系残務整理回想記」(『海軍施設系技術官の記録』所収)です。私はこの「海軍省分室」というのは何を意味するのか、ずっと謎でした。その謎が最近、解けたので今回はそのお話を。

昨年、神奈川県立歴史博物館の特別展「陸にあがった海軍」の図録に収録されている「第三〇一〇設営隊の行動記録」という新発見の文書(本号13ページに収録記事)には、「任務」として「海軍第十一分室施設及第七分室施設」と書かれていました。そして「功績概要」の「行動」欄には「19年10月13日 海軍省第十一分室ト呼称ス」「19年12月18日 第七分室電気設備新設着手」とあります。それで「分室」とはこのことだとわかったのですが、ではこの第十一分室と第七分室とはどう違うのだろうと、新たな疑問が起きました。連合艦隊司令部地下壕と航空本部等の地下壕をこのように区別して呼んでいたのだろうかとも思いました。

ところがこの第七分室は海軍水路部の日吉分室のことだったことがわかりました。慶應義塾大学の安藤広道教授編集による『慶應義塾大学日吉キャンパス一帯の戦争遺跡の研究』

(2014年3月発行)所収の「戦争末期の海軍による大倉精神文化研究所の利用について」(大倉精神文化研究所林宏美氏)に紹介されている元海軍気象部大田早苗大佐の手記「海軍勤務回想(気象関係)」の中に、次のように書かれています。「大倉精神文化研究所と海軍省第七分室(藤原工業大学)間に電信管制線、四整備、但し、第七分室、東京通信隊間は既設のものを切換へ使用するものとす。」また『気象百年史』にも「藤原工業大学の海軍省第七分室」という記述があるそうです。ここに書かれている藤原工業大学というのは、日吉にあった慶應義塾大学工学部の前身です。校舎は現在の来往舎近辺で、昭和19年にはすでに工学部になっていましたが、慣習的に藤原工大と呼んでいたのでしょう。この日吉の海軍水路部については『慶應義塾百年史』にも記載があり、林宏美氏はこれについても紹介しています。それによれば「昭和19年10月1日から工学部ロッカ一室120坪を海軍水路部に貸与した」「日吉分室と呼んだ」そうです。しかし、この日吉分室は翌年4月15~16日の空襲で全焼し、工学部校舎全体の8割が焼失しました。

というわけで、第十一分室は連合艦隊の日吉司令部を指すということになります。第3010設営隊が19年12月18日に着手した「第七分室電気設備新設」とは、この「電信管制線、四整備」のことなのでしょう。ちなみに大倉山の海軍気象部は第五分室だそうです。

ところで余談ですが、先に紹介した『海軍施設系技術官の記録』には、第3010設営隊に先立って日吉で海軍地下施設を築造し始めた第300設営隊についての記述もあります。この設営隊は、元隊長山本将雄技術大尉によれば「軍令部総長より特命を以って命名された特別設営隊」だそうです。また同書の「海軍設営隊・施設部等一覧」には、第300設営隊は「昭19・7・15 横須賀海軍第一部隊編成直後日吉台G・F地下作戦室設営」と書かれています。この「G・F」とは連合艦隊司令部の略号です。もちろん連合艦隊司令部地下壕の掘り始めは8月以降ですから、7月時点で工事にかかったのは第一校舎前の待避壕です。しかし7月15

日に編成され直後に日吉に向かったということですから、この日が日吉の海軍地下壕工事の開始日、あるいはそこから近い日のうちに工事着手ということになります。なお第3010設営隊の行動記録では9月1日に「隧道切削、道路開削」と書かれています。これが第3010設営隊の地下壕工事開始日になります。

資料紹介

《昨年公表された新資料》第3010設営隊行動記録 運営委員 山田 譲

厚生労働省 社会・援護局業務課調査資料室に保存
神奈川県立歴史博物館 特別展「陸にあがった海軍」図録46ページに写真掲載

原文は横長の用紙に縦書きの表の形で書かれている。本文は「功績概要」で「行動」「敵襲被害」「成果」の3段に分けられ、「敵襲被害」の欄には記載なし。以下、(成果)の補記がないものは「行動」欄の記載。行を変えは原文と異なる。

文字表記は原文通りで旧字体には現在の字体を〔 〕でおぎなった。文中「山本部隊」とあるのは第300設営隊。「第七分室」とあるのは工学部校舎内にあった海軍水路部日吉分室。

表題「第3010設営隊」

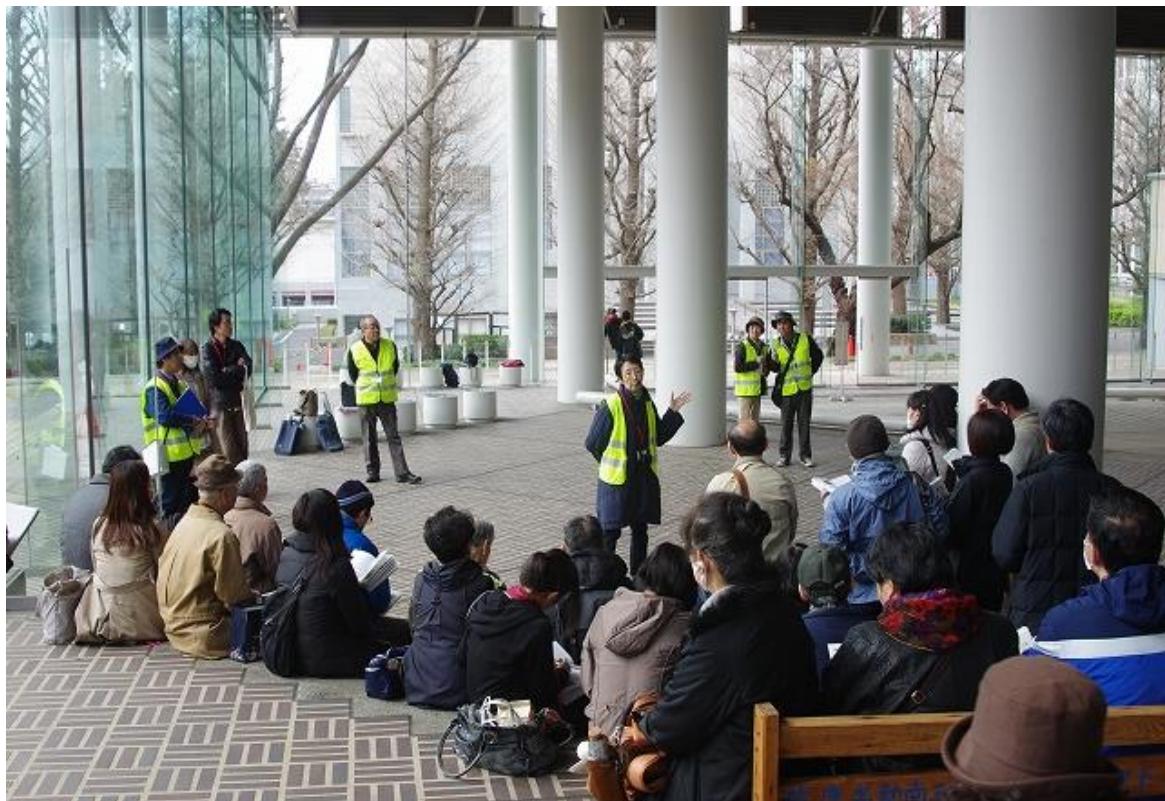
上部記載事項「艦隊区分 横須賀鎮守府」「軍隊区分 横鎮部隊」
「任務 海軍第十一分室施設及第七分室施設」
「所在 (19年8月) 東京 (9月) 横浜 (10~12月) 横濱[浜]」

19年8月15日	編成、横鎮部隊に編入 東京都ニ駐在、海軍施設本部據[拠]任区域ニ於ケル設営作業ニ從事
19年9月1日	分遣隊横濱[浜]市港北区日吉町ニ進駐 隧道掘鑿[削]、道路開鑿[削]
21日	本隊進駐、分遣隊と合同 中棟改造工事着手
19年10月1日	仮設製材小屋建方、製材機加工機取付着手、南中北寮修理工事
19年10月5日	(成果) 製材小屋竣工
7日	假(仮)設工具倉庫着手、烹炊所洗面所着手
8日	(成果) 第二隧道山本部隊掘進ト合致貫通
12日	(成果) 第五隧道第四隧道ト合致貫通ス
13日	海軍省第十一分室ト呼稱(称)ス
22日	仮設隧道使用火薬庫着手
24日	兵舎新設工事着手 (成果) 第七隧道貫通 火薬庫竣工
19年11月27日	各隧道防水及補修工事
19年12月1日	前月ニ続キ第十一分室隧道掘鑿(削) コンクリート打及附帶設備新設 (内部艤装、電気水道設備)
18日	第七分室電気設備新設着手
31日	(記事なし) (この行で文書終了)



キノコ型耐弾式堅坑前から見た富士山と丹沢大山、手前は紅い梅の花

マリアナ諸島を飛び立ったB29の編隊は、富士山を目指し北上後、鶴見川、多摩川方向に向かい、京浜工業地帯を爆撃した。



見学会前のオリエンテーション風景（来往舎にて）



講演される駆逐艦“雪風”元乗組員 西崎信夫さん
第10期ガイド養成講座第4回目（4月12日）

＜プロフィール＞

昭和2年（1927年）三重県生まれ。昭和17年（1942年）9月、15歳で海軍特別年少兵として広島県大竹海兵团に入団。昭和18年（1943年）11月、駆逐艦「雪風」に、魚雷発射管の射手として配属となり、マリアナ沖海戦、レイテ沖海戦、沖縄水上特攻に参加。戦艦「大和」、「武藏」の沈没に立ち会い、生存者の救助にあたる。

終戦後、海外引揚業務に従事し、その後、戦時賠償艦引き渡し要員として、中国、ソ連へと赴く。昭和22年（1947年）、復員。

現在、平和祈念展示資料館（新宿）において語り部として活動中。

※次号126号で講演の様子を掲載予定。

★活動の記録 2016年1月～4月

- 1/27 地下壕見学会 日吉本町西町会 39名
- 1/29 地下壕見学会 横浜高校社会科教員 6名
- 1/28 地下壕見学会 矢上小学校6年生・先生 109名
- 1/31 ガイド学習会（菊名フラット）
- 2/5 地下壕見学会 岐阜大学史学科田沢ゼミ 6名
- 2/6 第10期ガイド養成講座第2回（来往舎 大会議室）
- 2/10 定例見学会 41名 会報124号発送（来往舎205号室）
- 2/16 運営委員会（来往舎205号室）
- 2/18 平和のための戦争展inよこはま実行委員会（かながわ県民センター）

- 2/20 渡辺賢二先生の川崎文化賞受賞を祝う会 (明治大学生田キャンパス)
- 2/24 地下壕見学会 慶應高校 19名
- 2/27 定例見学会 63名
- 2/29 地下壕見学会 田園調布学園高校生・先生・保護者 64名
- 3/9 定例見学会 66名
- 3/12 第10期ガイド養成講座第3回 (来往舎 中会議室)
- 3/18 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会 (かながわ県民センター)
- 3/19 第10回日吉台地下壕保存の会 公開講座 (来往舎シボジウムスペース)
『アジア・太平洋戦争末期の日本海軍』 講師 吉田 裕 氏
- 3/26 定例見学会 55名
- 3/30 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会 (かながわ県民センター)
- 4/1 資料集「日吉は戦場だった」第2刷 発行
- 4/8 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会 (かながわ県民センター)
- 4/9 第10期ガイド養成講座第4回 (フィールドワーク日吉キャンパス周辺・来往舎中会議室)

★予定

- 4/23 定例見学会・会報125号発送 (来往舎205号室)

★定例見学会について

2016年1月から定例見学会は毎月2回実施しています。

原則として、毎月第2水曜日10時～12時30分・第4土曜日13時～15時30分

4/11現在、4月・5月・6月の見学会は定員を超えたので締切りました。

7/13(水)10時～・7/23(土)13時～は募集中です。

★夏休み見学会の予定

7/30(土)9時30分～、13時30分～・8/1(月)9時30分～

8/4(木)9時30分～・8/6(土)9時30分～・8/10(水)9時30分～

(8/27(土)は実施しません)

★地下壕見学会は予約申込が必要です。

お問い合わせは見学会窓口まで TEL 045-562-0443 (喜田 午前・夜間)

連絡先 (会計) 亀岡敦子 : 〒223-0064 横浜市港北区下田町 5-20-15 TEL 045-561-

2758

(見学会・その他) 喜田美登里 : 横浜市港北区下田町 2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス : <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 阿久沢 武史

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会